

異常気象、命、地球の将来

北谷 勝秀
NPO2050 理事長

はじめに

最近の気象は異常である。まるで季節感がない。「熱いも寒いも彼岸まで」などという言葉は最早通用しないようだ。最近では雨が降れば、南方のスコールの様に土砂降りになることが多い、竜巻は起こる、暴風、豪雪が当たり前だ。そして、財産が、人命が損なわれて行く。それは日本だけの問題ではない。世界各地で異常気象が当たり前になっている。水不足、食糧不足が報告されている。だが、人間は自然の猛威の前ですくんでいるのか、打つ手がないのか、目立った防御策は講じられていない。

1. 国際社会の対応

昨年未に提出された国連政府間気候変動パネルの報告に基づき、様々な会合が開催され、現在の気候変動・異常気象は人為的なものであると確認された。つまり、我々人間が化石燃料を使いすぎているとずばり言っているのである。それに対して各国政府代表は思い切った解決策を採択するどころか、先進国側と途上国側とに分かれ、それぞれ相手に責任を取れと言いはっている。途上国側は、大気をかくほどに汚したのは先進国の今迄の経済活動の所為である、だから、先進国は相応の責任を取るべきだと言っている。反して、先進国側はインド・中国等の化石燃料の消費は今や先進国に負

けず劣らずだから適応の対策を講じなければと言っているが、解決策は見えてこない。日本政府はというと、2020年のCO2削減目標を2005年比で3.8%減とすると発表した。それは、今までの削減目標より大幅に低く、多くの国々から批判を頂き、信頼と面目を失うことになった。

なぜこのような状態で膠着し、どの政府も人類や世界の将来に対して早急に対策を講じないかという、それは、国際会議に出てくる代表たちは官僚と専門家、自国の政策と経済活動を擁護するという責任を負わされているからである。彼らには人類の将来、地球上の全生命を守ろうという気概もなければ意志もない。自国の弁護と経済活動の推進だけが命題なのだ。そして、このような国際会議に出てくる代表たちは殆ど男性だということを我々は明記しなければならない。

2. 女性とは

女性が本質的に男性と違うのは、女性とは「いのち」産み、育てるのが本能であるということだ。そして、母親の自分の子どもに対する愛は男性とは比較にならないほど深いと言えよう。

母親の子どもたちへ注ぐ愛情、思いやり、慈しみといったものが世の中に満ち満ちていれば、世の中は和やかであろう。反面、

この母の愛が十分に行き渡らないような条件が増えてくると社会は住みにくくなり、人の命も軽く扱われるようになる。実際、現在の殺伐とした世の中を観察すればこのような見方が正しいのではなかろうかという気がしてくる。日本の科学偏重の学校教育のあり方、グローバル経済の非人間性、政治家に良く見られる自己中心的な人々や集団の増殖、女性や社会的弱者に対する暴力や不平等などといったものが人の命を軽んずる風潮を作り出し、環境破壊を引き起こし、各地で悲劇を撒き散らしている。そして、人々はそれらの現実を半分諦めの気持ちで受け入れている。そこに欠けているものは愛であり、慈しみであり、思いやりである。

世界が平和であるためには、ありとあらゆる「いのち」が大切にされなければならない。大気温暖化や異常気象を防止し、地球上の全生命を守るのなら、何にも増して必要なことは、女性の視点が各国の政策に取り入れられ、国際的な合意がまとまることである。現在の男性中心の合意形成の仕組みでは、人々は周りに対する思いやりや助け合いの精神を忘れ、自分が生き延びることに夢中に成りがちである。それでは、自分たちの作り出した環境問題を自分たちで解決しなければならないとは考えない。これが現代の悲劇であり、地球の将来を脅かすものである。

3. 先進国の庶民は

現在の多忙な生活を強いられている先進国の庶民は、いかに、時間をかけずに、かつ、安上がりに生活するかという思いに取りつかれがちである。そこで、工場で生産

されたファーストフードが珍重され、手抜き生活がもてはやされる。スーパーやデパートなどで売られている食品は見た目にもきれいで、食べても口当たりが良く、しばしば安価である。だが、これらの食品は化学薬品や添加物を山ほど含んでいる「命のない」食品である。悲劇は母親や女性たちがこのような社会の風潮に巻き込まれ、手抜きの食品を子どもたちや家族に提供することである。

命を育み、体にとって、また環境問題から見ても、有益な食品とは、一口に言って、農薬や化学肥料を使わずに作られた野菜類、汚染されていない動物性の食品、食品添加物を含まない加工食品などであろう。まあ昨今では稀有の食品とも言える。でも、このような食品は探せば必ず見つかる。有機農法による農産物を売り物にしている店、自然食品店などを訪ね歩けば必ず見つかる。

命を育み、健康を守るために私たちが心得なければならないのは、そのための知識を仕入れ、それを実行するということである。いくら忙しくても、時間を割き、実行しなければならない。実行すれば確信が持てるようになる。医者ということやテレビの宣伝を鵜呑みにしていたら命はいくつあっても足りるものではない。特に、命を産み、育む女性にそのような知識を仕入れて頂きたいものである。世の中の女性たちがテレビのコマーシャルの宣伝を信ずるのみで、自分や家族の命を守るという努力をしなければ、人類は遠からず自滅することになるだろう。世界で一番教育を受けているのは日本の女性だ。その教育の高い日本の女性が考えることを他人任せにしておいてはいけない。自分の責任において最高の選

択をすべきである。

4. 途上国の女性

反面、開発途上国に行くと、女性の地位は随分と低い。彼女たちに選択肢はあまり与えられていない。読み書きできない女性が非常に多い。それは、自分で判断できない、泣き寝入りのみが許されているという生き方である。最近パキスタンで起きたマラさん銃撃事件は、彼女が学校に行くのがけしからんと狂信者たちによって起こされた事件である。インドでは集団レイプ事件が後を絶たない。またアフリカの女性性器削除など、地域の文化という名目のもと、当たり前として起きている。日本では考えられないようなことが途上国に行くとまかり通っているのが現状である。私たちはこのような不条理を黙認してよいのだろうか、良心が痛まないのだろうか？

若し両親が「貧乏だから」という理由で、学校へ行くこと、お医者さんにかかること、ご飯を男の兄弟と一緒に十分に食べることを否定した場合、あなたはどうか感ずるだろうか？途上国では、多くの場合、女性は家庭内の男性の意思に振り回され、栄養不良で発育不全、人間としての存在を否定されるような経験を強いられている。先ず、読み書きのできない、自分の意思をはっきり述べることの出来ない半人前の存在で、水汲み、炊事、洗濯、家畜の世話などに従事し、長ずるに従って男性から「子どもを産む道具」としか認められない人生を送っている。そこには人間としての尊厳も基本的人権もない。自由意思も許されない。5-6歳くらいから人前で踊ることを強要されたり、売春をさせられたり、時には借金

のかたとして歓楽街に売り飛ばされることも良く見られる。

アフリカ大陸では、戦争がおこり一国の軍隊が攻め込んでくると、戦略として、その土地の女性たちを兵士たちが片端から凌辱することが良く見られる。また、女性性器削除や家庭内での「名誉殺人」、胎児が女性と判明した場合の中絶などなど、女性を標的にした男性からの不平等な仕打ちは数限りなくあり、この分では女性の命はいくつあっても足りるものではない。

現在、世界では2分ごとに一人の女性が妊娠・出産に関した疾病で亡くなっている。これは妊産婦が何時でも医療の恩恵に預かることができれば避けられることである。でも、それがなかなか実現しない。理由は？僻地に住む貧乏な女性の命を守ろうという政治的な決意が為政者（男性）の間に欠けているからである。先進国に住む私たちに、途上国貧困女性たちの運命に対する関心と思いやりの精神が欠けているからである。

上に述べたことは南アジアからアフリカにかけて日常見聞できることのほんの一部でしかない。わが国の様に社会開発が進み、教育や保健制度の発達した国では想像もつかないようなことがまだまだ途上国の女性の健康と命を脅かしているのだ。私たち日本人が途上国の女性たちの為に出来る最低の事は、少なくとも、彼女たちが天命を全うすることができるようお手伝いすることである。日本が戦後社会開発を成し遂げたその教訓や経験を途上国の支援に役立てなければならない。途上国の女性たちが新しい命を産むために自分の命をなくすことがないようにお手伝いをすべきである。そのためには、日本は国際社会で指導的な立場

をとり、家族計画・リプロダクティブ・ヘルスの普及を図り、そのための国際支援を増額すべきある。日本の経済力から考えると僅かなお金で世界中の女性の命が救えるようになるのだ。

5. 世界平和と女性の社会参加

世界が平和になるためには、世界中のいのちが生まれ、人為的な理由や不作為によって人命が損なわれることがないということが大前提となる。具体的には世界中の女性が健康で、不平等や不条理に悩まされる事がなく、健全な命を産み、育むことが出来るようになるということである。そして、家庭内で、地域社会で、子どもたちお互いに愛すること、思いやりの精神を持つことを教えることである。そのために、今必要なのは、女性に対する偏見や不平等を排し、恵まれない女性たちに支援が行きとどく世界を作ることだ。また、女性の声が世界の政治や経済で尊重され、政策に反映されることである。そういう意味で、日本の国民と政府はかつての様に国際社会で音頭取りをしなければならない。何としても、途上国の貧しい、恵まれない女性たちのいのちを救うために最善の努力をすべきである。そして、子どもたちの将来が安泰であるよう、世界中で殺しがなくなり、女性が不当な扱いを受けない社会を築くよう、官民一体でことに当たらなければならない。

その他に、人と生まれても、いのちを比較的「ないがしろ」にされているグループがあるということを忘れてはならない。それは開発途上国に貧しく生まれた若い人たちだ。若い男女とは10歳から24歳までの年齢層で、世界に約18億人いる。この人た

ちは平均1日¥150前後で生活することを強いられ、そのうち1億人は学校にも行かせてもらえない。理由は「貧困」だからだ。国連事務総長の最近の報告によれば、「2010年末には7510万人の若者が雇用されておらず、雇用されていても1億5200万人は給料が低く危険な仕事についている・・・2000～09年には、後発開発途上国に住む20～24歳の女性の31%が18歳以前に出産している・・・毎日15～24歳の3000人がHIVに新規感染している。多くの思春期の少女や若い女性は性的な暴力や虐待に曝されている・・・アフリカでは1億から1.4億人が女性性器削除を受けている」とのことである。当然、少女の人身売買や児童婚も数限りなく見られる。

元気に満ち溢れてはいるが、読み書きが碌に出来ず、定職もなく、毎日ブラブラしている若者たちが町にあふれ、集まって、興奮を求めるとなれば何がおこるであろうか想像するに難くない。そこに見られるのは社会不安であり、往々にして部族間の抗争であり、この様な若者を利用しようとする様々なグループである。そして、必然的に危険に曝されるのは同年代の女性たちである。そして彼らのいのちがいとも簡単に消えていく。多くの途上国の政情が不安であり、世界に争いが絶えないのも「むべなるかな」である。世界人口の1/4に当たる若者たちが年齢に応じて学校に行くことができ、世の中の秩序を守ることを覚え、まともな職に就くことができ、その上自分たちやまわりの人たちのいのちを大切にすることを学べば、世界は確実に平和に向かって行く。そのため、国際社会は事あるごとに、若者

に教育を、職を、リプロダクティブ・ヘルスをと決議している。でも、現実決して途上国の若者のたちにとって生易しいものではない。彼らが聞くのは常にスローガンのみであり、見るのは厳しい現実である。そして、政治家の不作為や私たちの無関心が彼らの信頼感を損ね、いのちを粗末なものとしている。

6. 国際社会の決意

国際社会は、ミレニアム開発目標実現に向けてそれなりの努力を重ね、ある程度の成果を見せている。だが、私たちの努力は満足ということからは程遠い。途上国に人々にとって必要なのは、1)正しいリプロダクティブ・ヘルスの情報であり、必要とするサービスの入手である。2)いのちを育み、健康に生活するための食料と情報の入手である。3)世の為に貢献する若人を育成する教育であり、職業訓練である。そして、4)男女を問わず、お互いに助け合い、慈しみ合うと言う精神構造である。これは、現在の国際社会の支援のあり方ではたやすいことではないが、やりようによっては効果を上げることが出来る。それは、先進国の若人たちを動員して、ピア・エジュケーション(若者同士の相互啓発・支援)や人間開発プロジェクトを積極的に導入することだ。日本の「青年海外協力隊」やアメリカの「平和部隊」はその先駆けとなり得るし、様々な民間組織も途上国の需要に応えるプロジェクトを支援出来る。世銀や国連諸機関、先進諸国の政府が民間組織と手をつなげば、必要な資金、技術を提供できるし、お互いの長所を生かして、途上国の

問題解消や政情安定にも寄与できる。そして世界が少しずつだが着実に平和に向かう。これはやれば出来ることである。

各国の若者を動員して、正しい食べ方や生き方の勉強をさせればHIV や他の感染症に対して有効な対応ができる、教育の普及を図ることで児童婚や女性の虐待を減少させることが出来るし、女性に対する不平等や不当な扱いを減らし、行くことが出来る。更に、教育は若者たちを社会の有用な人物に育てることが出来る。要は、こういうお手伝いが出来る人たちが「手を伸ばす」のか伸ばさないかにかかっているのだ。世界で不遇をかこっている若者に充実した人生を送らせ、世界の将来を明るいものにするのか、それとも、今の逼塞した状態に放置しておくのか、全て私たちの考え方や地球の将来にどう対処するのかという決意が重要なカギを握っているのだ。

さあ、私たちは何をすれば良いのだろうか？ 今まで通り、自分のことだけ考えていけば良いのか、それとも、皆で世界の将来を明るいものにするために一歩、二歩と踏み出すのか、この辺で決めなければならない。最早猶予はないのだ。先ず、日本の若者と女性が立ち上がり、世界平和の魁となることを願うのみである。

日本の有識者の方々、お母さん方、全女性、引退したシニアの方々、更にはこれから社会に出て活躍する若人の決断と救いの手をひたすら願うのは途上国の女性のみでなく、全人類の悲願でもあるのだ。ぜひ、地球上の全生命を救うために立ち上がり、手をさし伸ばして頂きたい。